

英知通信



昭和47年3月31日

英知大学

No. 5

卒業おめでとう

きょうここに卒業各位、ご父兄の方々のご出席を仰ぎ、教職員および在学生の皆さんと共に、昭和四十六年度、英知大学、英知短期大学卒業証書授与式を挙行致しますことは私の大きな喜びであります。いま卒業される皆さんに対しまして、私は本大学を代表し、心からおめでとうとお祝い申し上げます。きょうの式典をこの新しい講堂で行なうことは私の夢であり、希望でありました。昨年八月中旬、定礎式を行ない、今にちまで鋭意建設に努力してまいり

式

学長 岸 英 司

ました。しかし秋の長雨にまたたげられ、工事が予定よりも遅れましたが、とにかく講堂を使用しうる状態にまでこぎつけることができたのであります。いまだ完成に至らないこの講堂で式をあげることは、皆さんの卒業の未来と私たちの人生の未達成を象徴するかのうに感ぜられ、これまた意義深いものがあるかと存じます。私たちの喜びを更に加えますものは、フランス文学科の皆さんの卒業であります。本学では、昭和四十一年の神学科、昭和四十二年の英文学科、そして昭和四十四年三月にイスパニア文学科第一回卒業生を

辞

送り出してより、フランス文学科の卒業が待たれておりました。きょうはじめてフランス文学科は第一回の卒業生を送り出し、ここに英知大学のすべての学科はその年次計画の完成をみたことになりました。

さてきょうから皆さんはもはや大學生としてではなく、社会人として社会で生活しなければならぬのであります。これからの皆さんの前途には何が待ちうけているのか誰も知ることはできないと思います。皆さんがこれからどのような未来を切り開いてゆくにせよ、この大学で学んだところのものが生かされることを私たちは望んでおります。私はきょう

現代における 人間性の喪失

うの皆さんの卒業を祝って、一言私の希望を申しのべてみたいと存じます。

現代の私たちの生活について考えてみますと、それは科学技術によって支えられた生活であると言うことができるかと思えます。それは大変便利で快適な生活を約束しかつ実現しております。この事は否定できません。しかしこんにちの世界をふり返ってみますと、現代における人間

性の崩壊ないし喪失はあらゆる分野にみられる現象であります。私たちは最近日本で起った過激集団による一連の集団殺人事件に大きな衝撃をうけておりますが、この事件を、日本人の血の中に流れる集団的残虐性の表われとみるか、あるいはまた彼らの主義の行きつく所、人間の抹殺に終るものをみるにせよ、宗教によって代る何らかの思想ないし行動に、非人間性というものがつきまわっていることに注目せざるをえないのです。宗教は人間を解放するものであります。疑似宗教はそのように見えて、実は人間を圧制するものだというところを知ることがあります。



人類の歴史におきましてはいづこにおいても、真の宗教の失われゆく所、疑似宗教があり神ならざるものの絶対化、神話化が起つてまいります。

人間は本来神話的動物とも言えるのであります。真実の神秘の失われゆく所、神話は必然的に起つてまいります。人間は宗教あるいは神話なしに生きてゆくことができません。このことを古代人にとらず現代人も立証していると申して過言ではないと存じます。現代人の誇る科学も技術も、あるいはまた政治も経済も宗教にとつて代る神話となることができます。神話からの解放、神話の

人類の未来 への希望—愛

超克は宗教によらざるを得ないのであります。なぜなら、宗教こそは何ものにも従属することのない人間、本来の自己、真の自由を人間に与えるからであります。

さて人類は進歩と進化の過程にあるということをこんにち私たちは確信できますが、しかしこのことは、人間が正しい方向にかじを動かす時のみであるということを、現代の偉大な思想家であったティヤール・ド・シャルダンが教えております。

人類の超—人間格、超—意識化、簡単に申しますと、人類と宇宙の完成は私たちの未来への信仰、人間への信仰にかかっています。人間への信仰とは私たち相互の共感、シンパシイであります。共感こそは人格と人格とを内的に結びつける力であり、共感によって人間の中心と中心とが近づき合うのです。これが愛であります。愛とは何か、愛とは自己ではない他者のうちに自己を見出し、そこで自己を完成することだとティヤールは申しております。愛には上への突破があります。すなわち神への上昇であります。愛のうちに生きる者は必ず神へ引き上げられるのです。地球の未来、それは輝かしいものでありましょう。もしも私たちがあらゆる思索と行動において、人間と人間とが互いに近づく超—中心化に手をかす限りにおいてであることを銘記したいと思えます。きょう卒業される皆さん、先ほど読みました愛の使徒ヨハネの第一の手紙

にありましたように、私たちは愛のうちにとどまりましょう。私たち相互の愛、これがこの世界における最も強い力なのです。宇宙の本体、究極の実体、ものの最も奥深い所にあるもの—それは愛に外なりません。英知、サビエンチアの人とはこの愛を洞察する人に外なりません。大学の

本館の西側にかかげられているイエズスをいただく聖母マリアの像、セデス・サビエンチエはこの愛の洞察をあらわしております。英知大学を卒業される皆さんは人間性の失われゆく現代世界に、人間性を与える使命を荷なっているのです。私たちが英知—サビエンチアにおいて、いつま

でも共に結ばれ共に生きることを、きょう確認し、それを喜びたいと思います。終りにきょうの皆さんの輝かしい門出にあたって、皆さんの前途のご多幸とご健康をお祈りして私の武辞といたします。

(昭和四十七年三月十三日)

昭和四十六年度卒業式壮厳裡に挙行

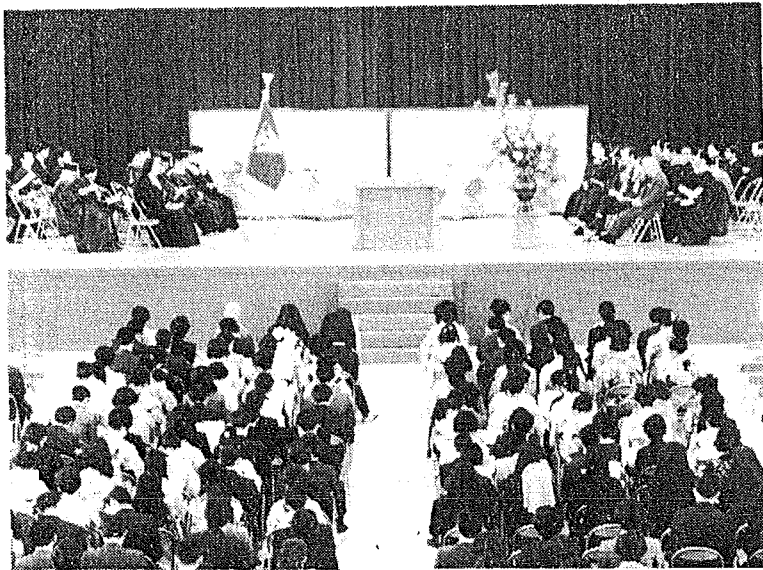
—米領事、仏総領事も列席—

昭和四十六年度、英知大学第六回英知短期大学第九回卒業証書授与式は、三月十三日(月)午前十時より完成を真近にひかえた新講堂において壮厳裡に挙行された。本年度の式典には、アメリカ領事、フランス総領事がそれぞれ列席され、卒業生一同に大きな感激を与えた。卒業生は神学科三名、英文学科八一名、イスパニア文学科二七名、フランス文学科二三名、短期大学宗教科九名、合計一四三名で、これに多数の在學生、父兄、修道会関係者たちが出席し、卒業生の晴れの門出を祝福した。なお式次第はつぎの通りであった。

- 四、祈祷 一同
- 五、聖歌 三(一) 一同
- 六、卒業者指名 教務課長 森木澄男
- 七、卒業証書授与 学長 岸英司
- 八、賞状賞品授与 学長 岸英司
- 九、学長祝辞 学長 岸英司
- 十、来賓祝辞 ノートルダム女子大学学長 シスター・メアリ エウジエニア
- 十一、アベ・マリア 英知大コーラス 卒業生
- 十二、記念品贈呈 在學生代表
- 十三、送別の辞 バッハ作曲変ホ長調前奏曲 フーガ 卒業生
- 十四、演奏 パイプオルガン 関知子
- 十五、答辞 卒業生代表
- 十六、仰げば尊し 卒業生
- 十七、閉式の辞

- 一八、讚美歌 四〇五 一同
- 一九、卒業生退場

なお、卒業式直後、各学科別に記



新講堂建設の恩人に感謝

念撮影が行われ、つづいて体育館一階食堂において学生会主催の送別会が開かれた。また午後からは各学科別に、大阪市内のホテルでそれぞれ謝恩会が催され、最後まで別れが惜しまれた。

体育館兼講堂の建設がすすめられている矢先、田口芳五郎前学長と岸英司学長の尽力によって、オランダのフレングメイヤー氏の主催するスイスのフリブルグ助成財団から一万ドルの多額にのぼる寄附がといた。この寄附によって、舞台装置ならびにトレイニング・ルームの設備を見事にととのえることができたことはまことに望外の喜びと云わざるをえない。

また岸学長の依頼によって、京阪神急行株式会社の常務取締役丸谷英徳氏を通じて、森薫社長より三十万円(の寄附が得られた。これは一階学生パーラの机や椅子などをととのえるのにあてられる二人の恩人の絶大な厚意にたいして心底より感謝してやまない。

晴れの受賞者 感激もひとしお

昭和四十六年度卒業式において、学業成績優秀者および学生会功労者にはつぎのように賞状あるいは賞品が授与された。

- 神学科 渡辺かをる
 - 神学科賞 中川 秀子
 - 大阪大司教賞
 - 英文学科賞 石原田正広
 - 同 桜井英子
 - 同 アメリカ総領事賞 北川都子
 - 同 コロンバン会管区長賞 安達泰子
 - 同 オブレート会管区長賞 巽 俊二
 - 同 鬼塚真知子
 - 同 玉手健裕
 - イスパニア文学科 蔵田万里子
 - 同 イスパニア文学科賞 井上章子
 - 同 イスパニア大使賞 古井多喜子
 - 同 小栗 猛
 - フランス文学科 熊沢ゆき
 - 同 フランス文学科賞 田中敬子
 - 同 フランス総領事賞 高山みどり
 - 同 遠藤初子
 - 同 成瀬和子
 - 同 豊田博志
 - 学生会功労賞 玉手健裕
 - 英文学科 江見年男
 - イスパニア文学科
- なお本年度の卒業式においては、列席されたアメリカ領事とフランス総領事の手から直接それぞれの総領事賞が授与されたことは意義深いことであった。

英知大学の人となつて

小林 裕



英知の英文学科のスタッフに加えていた。もう一年である。かつて長く阪急の神戸線を利用しては、私には、園田近くを通る時、いつも英知大学の建物を遠くに眺めたものである。しかし、夢にも自分がその人間になるとは予想しなかった。何かの縁が私を英知に結びつけたのである。英知の中の幸せを満喫している私である。

—大学のこと—

カトリックの大学であつて、まずキャンパスには神父さんとシスターの姿が異彩を放つ。以前私などにはカトリックに於て神父さんやシスターの方が家庭を持たれない様になつて、その必然性を理解することが出来なかつた。それは特にカトリックの信仰を身近かに持たぬ人の皆漠然と抱く疑問であると思う。しかし、英知の中に入って神父さんやシスター達の日常のお仕事を身近かに見て、そういう疑問は私の場合消えた。私は布教する側に在る人が家庭を持たないことの必然性を全く素直に理

解する事が出来る。それは全く自然であると感じもする。カトリックに於てそうなつて歴史の淵源を私は知らないが、私の感性に於て全くそう感じる事が出来る。まず家庭を持たないのだから私の財産を貯えて子に譲ずるなどという考えを持たれることもないであろう。世の中のたいいてい悪事は妻の為子の為という名分のもとなされるといつてよい。また、他人には子供は自然に育てるべきであつて勉強などしなくてよいとか学校などどこでもよいのですと言つておきながら、自分の子供にだけはもっと勉強しろとか、大学は国立でなければダメだなどと尻を叩く事もないであろう。自己の家庭を持たぬからである。或いは妻子のある方の所へ必要があるからといつても、夜遅くなど突然訪ずれることはしにくい、家庭を持たずただ全く宗教活動に捧げている人の所へは必要とあれば深更訪ずれる事も許してもらへるかもしれない。しかし人間いつとも気を張りつめていられるものでもない。神父さん方として人間、緊張をといつてくつろぎたいとおもわれ省りみてとてもその様な生活は出来ないと思ふのだが、しかしそれだけ又一層、くじけずにそういう生活を守り通される神父さん方に敬服するのである。英知はやはりそういう神父さんやシスター達の精神や活動が

その校風の核になつて居るのだと思ふ。それはこの大学の個性である。

—学生のこと—

昨年四月始めて教壇にたつた日のことは忘れない。何か恐怖に似た感情におそわれたものである。教室では常に学生と格闘する様な気持ちであつた。やがて学生の気心もつかめる様になり、又そのうち、互いに気脈の通じ合い、私にとって友人といつてもよい学生も出来た。学生の人は柄は皆良い。勿論例外はある。しかし総じて性質は皆そう悪くないといつてよい。それは少数で教育がよくゆき届いていて、仮りに乱暴な学生が入つて来てもそういう面を發揮出来る余地がこの学園にないからであり、又校風にそういう事を許さぬ

厳しい何かがあるからである。私に何のお世辞を言う義理も持たぬ友達をこの学園に連れて来たことがあつたが、彼自身の知る大学と較べてである。皆大人しうない学生だなあ」と言つたものである。大人しいという言葉には無気力の意味が含まれて居るのではないかなどと悪く解する必要はない。私自身が一年間教壇に立つたうえからも、穏やかな素直な学生ばかりであると言ふ事が出来る。

—私のこと—

大学の教師たる私に課せられて居ることは、まず学生によい教育をすることであり、次にすぐれた研究活動である。私に果して教育者として又研究者としての才分が十分に有る

かどうか自分にはわからない。而し少くとも教室で講義をすることに又本を読み書き物をする事に喜びを感じることは出来る。したがつて、ただひたすらそれに励むことをするしか私には出来ない。学生諸君に対する授業には少くとも主観的には全力投球したつもりである。而し研究活動の方では、余り人様に誇れる程の物は書けなかつた。而し私としては至らなかつた所は次の年より良い物にすべく一意努力するだけである。至らぬ所はそう努めて充たす事によつて答えることが、私のとる通であると思ふ。

キャンパスは春休みで静かである窓をそつと開けると春めいたなま暖かい風が入つて来る。過ぎさつた英知大学の一年を懐かしく想ひ起す私である。(筆者は英文学科講師)

恩師と母校に真心をこめて

—卒業生代表による答辞—



卒業生代表による答辞は、英文学科の安達泰子さんによつて述べられた。学長をはじめ恩師より賜つた数々のご恩にたいして感謝の意が表明され、また在學生にたいしては、本学独特の暖かい家庭的な雰囲気をつつまでも大切に培うように、との願いが伝えられ、一言一句にあらわされた真心は、学長、教

授、来賓はもとより列席者一同の心の琴線に強くうつものがあつた。答辞の全文はつぎの通りである。

本日は新築されたばかりのこの講堂で、かくも盛大に卒業証書授与式をおあげくださいますとお礼の言葉もございません。来賓の皆様からのお祝辞、また学長様からの慈愛あふれるご訓辞を賜わり、ほんとうにありがとうございます。私たち一同は、おさとしのお言葉を深く胸にと

どめ生涯の座右訓にいたすつもりでございます。かえりみれば四年前、私たちが本学に入学を許されましたから今日に至るまで、学長様をはじめ諸先生方の慈愛あふれるご熱心なご指導によりまして本日めでたく大学の過程を終了することができました。その間に賜りました数々のご高恩のほどはゆめ忘れることができません。思えばこの四年間は夢のように早く過ぎ去りました。期待と不安に胸をふくらませて過した新人生の当りがまざまざとよみがえつてまいります。終始学長様がごらん下さつておられた正面の見物席を中心に学生全員が一体となり力を合せて行つた体育祭や、夜を徹して準備した大学祭などは一生、よい思い出となつ

て残ることでしょう。そうして大学生活を通じて学問だけではなく、広い視野とゆたかな心をもった人間になろうと誓いあった数々の友情も何もものにも変えることができません。聖パウロの言葉に、「私はよい戦いを戦い、走るべき道のりを走りつくり、信仰を保った」という言葉がありますように、私たちはよくぞ四年間努力してかわしい道のりを走りつくり、という達成感を感じないわけにはまいりません。私たちは今の母校ともお別れしなければならぬ。と思うと、さびしい気持ちで

体育館兼講堂完成へあと一息

—大学のイメージを一新—

昨年八月から工事がすめられていた体育館兼講堂は、このごろほぼ完成し、来る四月十三日(木)、午前十時より、創立者田口芳五郎前学長の司式によって落成式が開かれることとなった。新築された体育館は教授館の南側に位置し、以前よりあった木造の倉庫をとりこわして建てられたものである。一階は食堂、ティールーム、トレーニングルーム、音楽室、研究室、衛生室、学生パラー、応接室、和室、シャワー、更衣室、トイレ、倉庫など、四〇八坪二階が体育館兼講堂ステージ、研究室など四三五坪、三階には座席とフロントロウルーム、映写室、研究室など一七坪あって、全部合わせると九五二坪におよび、横三三メートル、縦四五メートルの鉄骨コンクリート三階建(高さは四階)、大屋根鉄骨の壮大さを誇るものである。

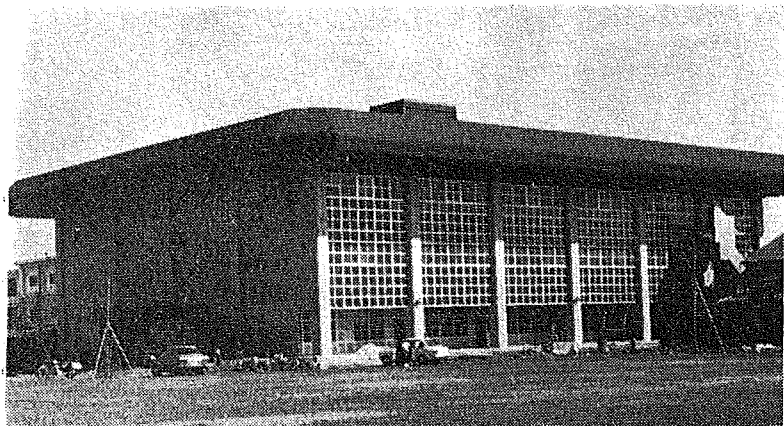
一杯です。

しかし卒業は同時に新しい人生の出発でもあります。十九世紀のアメリカが生んだ詩人エマソンの言葉に「天才とは前方を見つめるものである。望みを抱くのは人間であるが、創造するのは天才の業である」というのがあります。私たちは英知大学四年間の過程のうちにおいて学びとった単なる知識だけではなく、さらに源遠な英知をもって、エマソンの云うように前方を見つめて生き、すすんで社会に貢献しうる創造的な人間になることができるよう、今後な

設計は間帯谷真吾氏によってなされ、藤木工務店が工事を請負った。なお三階の座席の中央にあたるところに、大阪大司教区より寄贈されたパイプオルガンがとりつけられ、今後式典や催しが行われる際に名曲演奏が期待される。また全長二二メートル、奥行七・五メートルのステージは大学祭の催しなどにすこぶる好適で、しかも音響効果採光、照明などにも細心の注意が払われている。このように体育館兼講堂が完成されたことによって、英知大学全体のイメージが一新され、雨天時における体育実技に何ひとつ支障をきたすことはないことはもちろんのこと、あらゆる屋外競技の活動がますます活発になり、より一層充実した学生生活が営まれる

お一層の努力を払いつつけてゆく覚悟でございます。

在学生のみならず、母校についてはまだまだ発展改善の余地があることは認めなければなりません。しかしながらバラにはとげだけではなくて美しい花びらがあるように、英知には英知の良さがあることを認め、皆で力を合わせてますます立派な大学に仕立てあげよう、今後とも努力を払いつつけて下さいますようお願い申し上げます。何年一緒に生活しても顔と名前とが一致しないマンモス大学のマスプロダクションでは



ことが期待される。
なお建設総工費は一億七千万円で

なくて、全学一体となったこの家庭的な暖かい雰囲気をもつてもプライドをもって大切に、それを英知の伝統として末長くはぐくんできてゆかれますように。

また学長様はじめ諸先生方、私たちが卒業いたしましたしてもつねにかわらぬ愛徳をもってお守り下さいますように心からお願ひ申し上げます。以上はなほだ借越かと存じますが卒業生一同にかわりお別れとお礼の言葉にかえさせていただきます。

昭和四十七年三月十三日
卒業生代表 安達 泰子

そのうち六千万円はカトリック大阪司教区の寄附を仰いだ。これはひとえに創立者、田口芳五郎前学長の並々ならぬご尽力によるものであって昨今における英知大学の発展は、岸英司学長のリーダーシップと手腕によることは云うにおよばず、それとともに田口前学長のご高恩に負うところまことに絶大なものがある。また一億円は私学財団より借入したものであって、大学は来る二十年間のうちにこの額の返済の義務と責任をもって果してゆかねばならないのである。このために入学者よりの入学金および施設拡張費を毎年これにあててゆくつもりであるが、それとともに在学生をはじめ、卒業生や父兄の有志からの寄附をも期待しているの、額の多少にかかわらずご援助賜わらんことを心よりお願いしてやまない。

研究室 便り

○岸英司学長は来る四月三日、午前九時半より同志社大学の学生会館に

おいて開催されるキリスト教文学研究部において、「キリスト教の将来」と題するシンポジウムにおいて発表をする予定である。

○佐伯わか子助教授(英米文学講義担当)は、京大の笠原嘉助教授とともに、ハナ・グリーン著「デボラの世界」を翻訳し、去年十月十五日、みすず書房より出版した。

○森田諒二(喜多史郎)教授(英米文学概説担当)は、「日英比語較論」に続いて、「日英動詞比較論—英語動詞の使い方と働かせ方」を執筆中であつたが、最近脱稿、四月十日頃修光社より出版の予定である。

○大西忠雄教授(フランス文学、比較担当)は、本年十月上旬、清水弘文館より出版予定中の「比較文学講座—第四巻のために小泉八雲論を目下執筆中である。

○玉谷直美講師(心理学、教育心理学担当、カウンセラー)は、「対人関係における「共感」について」と題する学術論文を発表。これにより大会婦人協会より、去る一月十二日、一九七一年度国内奨学会、ホームズ奨学会、などによる受賞者(全国で三人)の一人となった。

英知通信

昭和四十七年三月三十一日発行
編集 英知大学学長
発行者 広報室

兵庫県尼崎市若王寺苗田
電話(06)四九一—五〇八三
〒六六一